

阿倍野プラザ 近代長屋を活用した居住支援プロジェクト

むすび紙芝居劇「ぶんちゃんの冥土めぐり」公演とお説法

2009年6月3日(水)、阿倍野プラザが協働して、大阪市阿倍野区王子商店街の高齢者が集う「FAサロン」にて紙芝居と劇を融合させた紙芝居劇が行われた。「むすび」は、西成・釜ヶ崎に拠点を置き、平均年齢76歳の高齢者が自作の紙芝居と劇を行うサークルである。お話は、幼くして冥土を訪れたぶんちゃんが、赤鬼・青鬼、閻魔に出会いながら、音楽に合わせて生き生きと「冥土めぐり」をするものであった。観客は80~90歳の高齢者が多く、演者の楽しげな演技に、思わず手拍子を叩いて盛り上がった。演劇後は、僧侶の川浪剛氏による「冥土」の解説と、死を迎えるに際し、「人との繋がり」・「仲間と集える居場所」が重要であるというお説法を聞いた。

阿倍野の高齢者が「死」というテーマに触れ、生と死の質を考える貴重な機会となった。 >> 黒木宏一(都市研究プラザ研究員)

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。



音楽に合わせて踊り出す演者たち

第一回阿倍野Religion-Caféの報告

2009年8月25日(火)、川浪剛氏が発起人となり、阿倍野プラザで、第一回阿倍野Religion-Caféが開催された。このReligion-Caféは、堅苦しい説法ではなく、おもしろい切り口の宗教のお話で、阿倍野にあるCafeのお茶やスイーツを楽しみながら、気軽に宗教に接してもらおうという狙いがある。今回は、浄土真宗大谷派三波冥寺住職・戸次公正氏をお迎えした。

戸次氏は、日本人には難解な漢文をそのまま朗読した読経ではなく、仏教の教えを日本語で分かりやすく説くという活動をされている。その取り組みについて、さまざまなエピソードを織り交ぜながらお話された。

講演後のCaféでは、参加者が思い思いに宗教について語り合い、「宗教をとても身近に感じることができた」「宗教に対する考え方が変わった」といった感想が聞かれた。

■黒木宏一(都市研究プラザ研究員)



宗教について語らう参加者たち

阿倍野Religion-Cafe 近況報告



第4回Religion-Cafeの様子(本田神父講話)

2009年8月25日(火)から、毎月一回開催しているReligion-Cafeも、2009年11月25日(水)で4回目を迎えた。初回から第3回までは浄土真宗入門ということで、浄土真宗南冥寺住職、戸次公正氏を迎えて、さまざまな切り口から浄土真宗についてわかりやすく教えていただいた。クリスマスの1ヶ月前となる第4回目では、大阪市の釜ヶ崎で活動する本田哲朗氏に、キリスト教の聖書を原語から訳し直すことで見えてきた、聖書の本来の意味について語っていただいた。これまでの参加者は、宗教関係者をはじめ、西成区のホームレス支援関係者、阿倍野区の飲食店経営者、近所の方など、地域や職業分野を問わない多様な属性の方々である。講演後のCafeの時間は、自由な語らいの場となっている。阿倍野の近代長屋を活用したReligion-Cafeは、「宗教」を通じた、人々のつながりの場として、徐々に広まりを見せてきている。

■黒木宏一(阿倍野プラザ研究補助スタッフ)